十　洞窟の内と外

プラトーン國家論Z（第七篇）に面白い譬話がのせてある。『玆に洞窟内に住む人々がある。其洞窟には、明り取りの穴が一つあるのみ。洞内の人間は、幼い時から其處に住んで居るので、其足と頸とは、鐵の鎖で嚴かに縛られて居るから、彼等は首を動かすことが出來ず、唯前面一方を見得るのみである。彼等の頭上の後手に、或る距りを置いて火が燃えて居る。其火と彼等との中間には、小高き道路があり、其道路に沿うて、人形芝居の黑幕にも比す可き低い壁が設けられてある。此の壁の前を、色々な器物や、動物の形像などを持運んで通る人がある。洞内の住民は其運ばれる實物を見ることは出來ない。否、彼等は相互の姿をさへ直視することが出來ない。唯右の低い壁に映ずる諸々の陰影を見得るのみである。洞外を通行する人々の談話の聲は、洞内に傳はる反響によつて聞くことが出來る。從つて洞民は、其聞く所の音聲は、前面の壁に映る影から發せられるものと思つて居る。處が洞民中の或者が鐵鎖を解かれ洞外に引出された。此人達は、燃ゆる火に始めて直面したが、陰影許りを見るに慣されて居た爲め、火光に眩み、碌々物を見ることが出來なかつた。然し段々慣れて來て、影でない實物を當面に見得る樣になつたとき、彼等は現に見る處の實物を實物と信ずる能はず、却つて洞内の陰影こそ實物であると思つた。程經て、彼等を高い山へ伴れて行き太陽を見せた。彼等の眼は等しく眩んで殆んど一物をも

見ること能はなかつた。幸に程經てから彼等は日光に照された諸物を、鮮かに見て取ることが出來るやうになつた。ソコで、彼等は考へた。我々洞内に在りし時、壁上に徂徠する諸々の陰影を實物とのみ思ひ込み、此影を觀察する敏捷、迅速を競ひ合つて居た。諸影來往の前後を能く知り、將來に對して結論を與ふるに巧なるものを智者、先覺者として尊信し之に多大の名譽を與へて居た。考へて見れば、實に愚な事をしたものである。ソンナ事をするよりも、我々は、ホメロスと共に『貧しき主人に事ふる貧しき僕たるこそ勝れり』と言はねばならぬと。處が此人達は再び洞内に歸つたが、其眼は最早陰影を見るに適せず、洞内に止れる人々と競つて常に敗を取つた。ソコデ洞内の人々は口々に言つた。彼等は解放せられ、彼等は洞外に登り行つた。而して今や彼等は其眼を失つて降り下つた。我々は夢にも解放を望み洞外に導き出されんことを希つてはならぬと。而して、人あつて、彼等を洞外に伴れ出さんとすることあるとき、彼等は、其人を捕へ、之を死罪に處した。』(アダム校本。ステファヌス頁五一四―五一七から摘意譯)

マックス・ウエーバーは、此譬喩を以て、舊式の學問觀の代表的なものだと評して居る。(「職業としての學問」第二版、一九二一年、一八頁)。私は此れは、ウエーバーの速斷だと思ふ。其證據として、同じ國家論S(第六篇、ステファヌス頁五〇八)。を擧げ得ると思ふ。其は、プラトーンが『知識と眞理の善に於けるは、猶ほ視力の太陽に於けるが如し』と云ふことを述べた條である。ウィリアモウッツ・メレンドルフは此一條を釋いて云ふ。『此條に於て、プラトーンは立證不可能な主張を爲しつゝあることを自ら能く知つて居る。彼の言ふ所は、實に言詮不及の一大事である。彼が對話者に要求する處は、所詮不可思議底のものである。……彼は此一段に於て不可及を告白して居るので、而して其こそ彼の哲學の最高所であるのである、科學の及ぶ所は遠い。然し科學は人類の本性が、其に一の限界を置くものなるを告白するとき、始めて其標的に達したものである。實在と生活の最根柢は、單に感性を超ゆるのみでなく――思索の力は能く感性を超越する――抑ゝ人間の理性が達し能ふ一切の彼方に在るものである』と。(プラトーン論。第二版。第一卷。四二一―二頁)

洞窟の内に鐵鎖に繫れて、壁上の陰影のみしか見る能はなかつた人間も、眼は當り前に具へて居たればこそ、洞外に解放せられ日光に照された後、當り前に物を見ることが出來るやうになつたのである。日光の本體は――善の本體同樣に――眼に見えず、頭で考へ分らぬとしても、兎に角、視力があれば、日光の助を藉りてこれを有るが儘に見ることが出來るのである。(此を *αποφαινω* = faire paraître, mettre au jour, faire voir, mettre sous les yeux と云ふ。) 而して、陰影しか見て居なかつた昔を憐むことを得る。眼がなくては、否、眼があつても、視力がなくなつて仕舞つては、日光ありと雖も、物を見ることは出來ない。だから、ハイデガーは言ふ。*λογος τεφρειν* としての「テオロギー」(神學)や「ビオロギー」(生物學)は Sacherfassung として、而して其れとしてのみの意味での *λογος* である。其の反對に「フェノメノロギー」(現象學)と云ふは、*λεγειν τα φαινομενα* 換言すれば *αποφαινεται* (有るものを有る儘に示す)としての *λεγειν* (語ること)の意であ

る。「フェノメノロギー」(現象學)と云ふ名には、其の「マキシマ」以外何物をも含まれて居らぬ。從て同じく「ロギー」と云はれて居ても、「テロオギー」や「ビオロギー」とは全く違ふ。後者は何れも其就て語る所の對象の內容を示して居るが、「フェノメノロギー」は、對象の內容に就ては何事も云はぬ。唯其のErfassung(捉へ方)の「仕方」(之をファイネスタイと云ふ)のみを云ひ表はすに止まるものである』と。(一九二五年夏期講義『自然及歷史の現象學序論』私藏寫本四九頁)

ウェーバーが中世の發見だと云つて居る――アリストテレースの百有餘の希臘諸憲法の事をウェーバーは忘れたるか？――實證、經驗方法は、畢竟此眼、此視力を鋭くする手段に外ならぬ。決して、眼其もの視力其ものを無用とするものではない。ウェーバーは「天來の着想」を重視し、之をプラトーンの「マニア」にも比し又陶然たる醉に例して居る。乍去、酒を呑まないものは醉ふことは出來ぬ。壺中の消息は、飲を解するものにして始めて知り得可きのみである。やれ論理主義、やれ唯物史觀、其他此頃の獨逸經濟學に喧しい普遍主義の主觀主義のなどゝ云ふこと、其れは何れも眼鏡の用は夫々に爲すであらう。眼に代り得るものではない。視力の足りない者に取つては、眼鏡の詮索は重大事であるに相違ない。然し鏡なしに、物を見得る眼を有つ人々は幸なる哉。憐れなる我々は、生れ付いて極度の近眼、年を取れば遠眼が加つて、近眼は少しも治らぬ。從て眼鏡が一つや二つでは不足を感ずる。色々な眼鏡を取り換へ引換へ――而して眼鏡にも始終流行がある――掛けて見て、僅かに當用を足して居る。折角洞外に引出して吳れる親切人があつても、斯う澤山眼鏡をあてがはれる樣では、寧ろ洞內に蟄居して陰影許りを見て居る方が勝しかも知れない。洞窟の內と外と其の優劣は容易に斷言し得さうにも見えないのである。(二六・一一・六)